

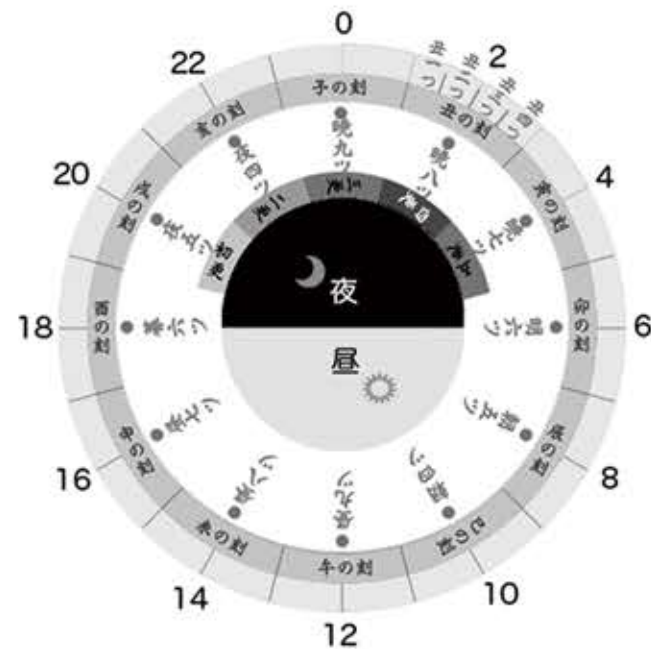
15 江戸時代の時刻

江戸時代の人的一天はおおむね太陽の動きに沿って行われていました。

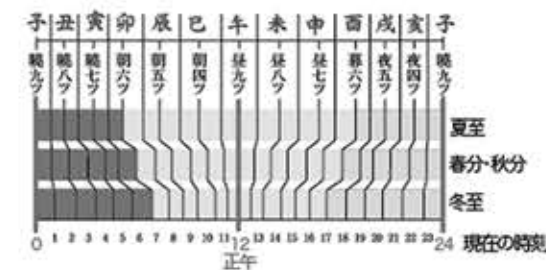
まず日の出36分ほど前の薄明るくなった時を明六ツ(あけむつ)、日没後36分頃のまだ薄明るいさが残る時を暮六ツ(くれむつ)として、昼と夜の境目としました。

そして明六ツから暮六ツまでの昼の時間と、暮六ツから明六ツまでの夜の時間をそれぞれ6等分して一刻(いっとき)とした。正午頃と午前零時頃の「九つ(このつ)」からほぼ2時間毎に一刻ずつ減らして、十時頃で「四つ」となり、その次がまた九つになります。一刻はだいたい2時間です。

ところが夏は昼の長さが長く、夜の長さが短いので、昼の一刻は長く夜の一刻が短くなる。一刻が変化するので「不定時法」と呼ばれます和時計はこうした不定時法に対応するように、重りや文字盤に工夫がこらされており、こうした時計に基づいて太鼓や鐘を打つ数で時が知らされました。



▲一番外側の数字が現在の時刻。しかし下図のように季節により変動がある。



左図は一番外側に現在の時刻を記し、一日の時間の呼び方を記したものです。これからわかるように、一日を12に等分して十二支に対応させた刻名で呼び、一刻をさらに4つに区切り、一刻、二刻、三刻、四刻と呼ぶ場合もありました。いわゆる草木も眠る「丑みつどき」は、丑の三刻だから、だいたい午前2時から2時30分頃。これはもともと定時法の考え方から出てきた時の呼称でしたが、江戸時代の庶民はこれを不定時法的に使用することも多かったのです。

16 江戸時代の方角

江戸時代には、方角をあらわすのに、東西南北のほかに、北を子(ね)として東回りに十二支に対応する呼び方がありました。

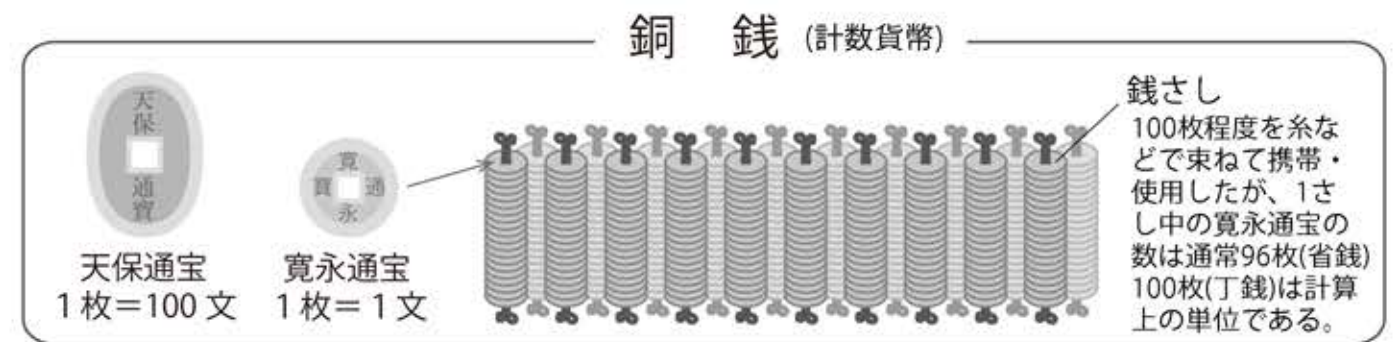
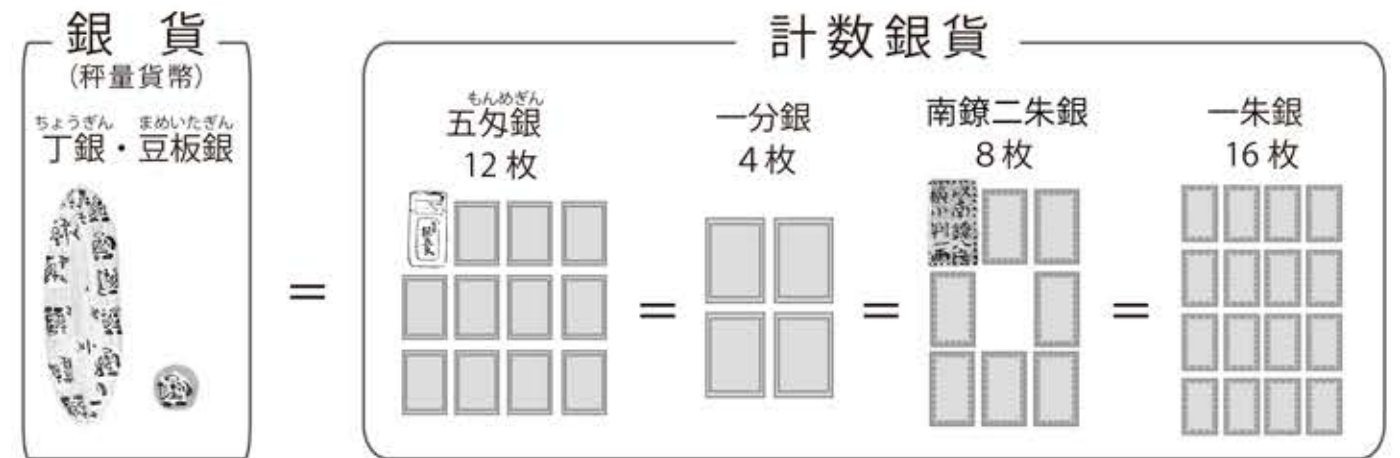
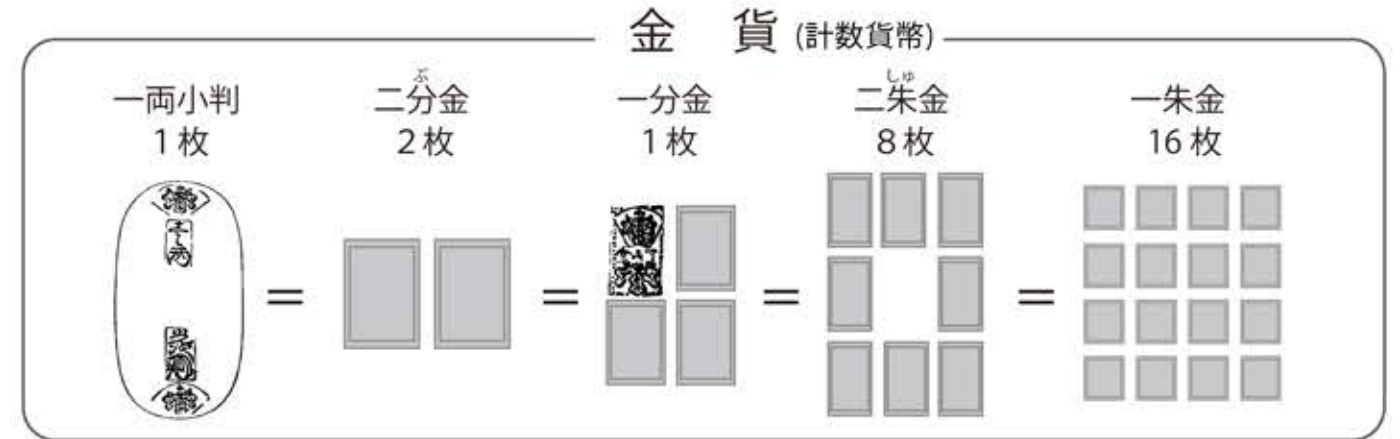
また北東を丑と寅の間として「良(うしとら)」と呼んで鬼門とするなど陰陽道に発する占いに由来する方角の考え方もあります。



17 江戸時代の貨幣

金・銀・銭は、大坂などの都市で両替屋により売買されて相互に相場が立てられ、それが各地に通達されて独自の相場が形成されました。

18世紀後半以降幕末の金銭高騰期までは、金1両=銀60~65匁、銀1匁=銭100文前後の安定期が長く続いています。なお物価との比較は時代や状況により異なるので一概にはいえませんが、近世後期の日雇の賃金はだいたい1日銀1~2匁で、銭に直すと100~200文くらいです。また白米1升(1.5キログラム)が1匁すなわち100文前後というのが標準です。



包銀 丁銀と同品位の少額貨幣である豆板銀を合わせて一定の量目で包んで封印したもの。恩賞および献上用には銀一枚=43匁、商取引用には500匁などで、上書きされた。

白銀 江戸時代に、銀を直径約10センチメートルの平たい楕円形に作って白紙に包み、主に贈答などに用いた。通用銀の3分に相当する。

銭1疋 10文